

幕屋(幕)

今回は、幕屋と庭を仕切る幕と板のうち、幕を見る。

幕は幕屋のおおいであり、幕屋を保護するものである。

幕屋のための板は、クリスチャンが一つになって教会として建てられ、そこに神が聖霊として住まわれることの予表。幕の教えの次に板の教えが書かれている。この順番は、どうでもよいものではない。クリスチャンの型である壁(板)が建てられる前に、キリストを象徴する幕でおおわれる必要があるのである。

幕

「幕屋を十枚の幕で造らなければならない。すなわち、撚り糸で織った亜麻布、青色、紫色、緋色の撚り糸で作られ、巧みな細工でそれにケルビムを織り出さなければならない。幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビト、幕はみな同じ寸法とする。その五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、また他の五枚の幕も互いにつなぎ合わせなければならない。そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に青いひもの輪をつける。他のつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにしなければならない。その一枚の幕に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の端にも輪五十個をつけ、その輪を互いに向かい合わせにしなければならない。金の留め金五十個を作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせて一つの幕屋にする。また、幕屋の上に掛ける天幕のために、やぎの毛の幕を作る。その幕を十一枚作らなければならない。その一枚の幕の長さは三十キュビト。その一枚の幕の幅は四キュビト。その十一枚の幕は同じ寸法とする。その五枚の幕を一つにつなぎ合わせ、また、ほかの六枚の幕を一つにつなぎ合わせ、その六枚目の幕を天幕の前で折り重ねる。そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の縁にも輪五十個をつける。青銅の留め金五十個を作り、その留め金を輪にはめ、天幕をつなぎ合わせて一つとする。天幕の幕の残って垂れる部分、すなわち、その残りの半幕は幕屋のうしろに垂らさなければならない。そして、天幕の幕の長さで余る部分、すなわち、一方の一キュビトと他の一キュビトは幕屋をおおうように、その天幕の両側、こちら側とあちら側に、垂らしておかななければならない。天幕のために赤くなめした雄羊の皮のおおいと、その上に掛けるじゅごんの皮のおおいを作る。」(出エジプト 26:1-14, 36:8-19)

幕屋には、四つの幕がかけられた。①撚り糸で織った亜麻布で作られた幕 ②やぎの毛で作られた幕 ③赤くなめした雄羊の皮で作られたおおい ④じゅごんの皮で作られたおおい

①撚り糸で織った亜麻布で作られた幕

一番内側、幕屋の中で奉仕する祭司に最も近くにあった幕。義を表す亜麻布、天を表す青、王の象徴する紫、虫けらとされ罪とされたイエスを象徴する緋色、これらの糸を撚り合わせてケルビムを織り出した。ケルビムは、罪に対抗して神の義と聖を守る務めを持つ生き物である。ケルビムは、裁きを表している。このケルビムは巧みな細工で織り出された。一針一針、刺し通されて作られた。イエスは、いばらを刺され、釘や槍を刺し通された。このケルビムは、イエスがカルバリの十字架で神の裁きを受けてくださったことを示している。

幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幅は四キュビト。二十八は四(普遍性)×七(神の完全さ)である。時代、地域を超えた全世界の王であり、完全なお方キリストの暗示である。

幕の数は十枚。五枚ずつ、青いひもの輪によって互いに連ね合わせた。こうしてできた二枚の幕を金の留め金五十個で互いに合わせ、一つの幕とした。五は、人間の責任を教えている数(十戒は、人の、神に対する責任と、人に対する責任とを要約して二枚の板にそれぞれ五つずつ書かれた)。五の倍数が幕屋に示されたのは、十字架で死ぬことによって、責任を果たされた救い主イエスを表しているからである。五十個ずつの青いひもの輪をつなげた五十個の金の留め金、五十はペンテコステ(大麦の初穂の束をささげる日から五十日目祭りの五旬節によるため)、つまり、聖霊降臨の数である。金は神の義を象徴。青いひもの輪は、聖霊を表す。つまり、この幕は、律法を全うし、ひとつとし、神の義を与えてくださったキリストの象徴である。おおって保護してくださる父なる神と二枚の幕をつなげる働きをなす聖霊なる神もまた、この幕に表されている。

「キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。」(エペソ 2:14-16<口語訳>)

②やぎの毛で作られた幕

民の罪を負わせ荒野に放ったアザゼルのやぎ(スケープゴート(他人の罪を負うもの、身代わり))、やぎは、罪とされたキリストの贖いを表す。

「二頭のやぎを取り、それを主の前、会見の天幕の入口の所に立たせる。アロンは二頭のやぎのためにくじを引き、一つのかじは主のため、一つのかじはアザゼルのためとする。アロンは、主のかじに当たったやぎをささげて、それを罪のためのいけにえとする。アザゼルのためのかじが当たったやぎは、主の前に生きてままで立たせておかなければならない。これは、それによって贖いをするために、アザゼルとして荒野に放つためである。」(レビ 16:7-10)

この幕は、内側の美しい幕の上に重ねられた。

この幕は、十一枚作られ、五枚と六枚につなぎ合わされ六枚目の幕は、幕屋の扉の前で折り重ねられた。その一枚の幕の長さは撚り糸で織った亜麻布で作られた幕よりも二キュビト長い三十キュビト。その一枚の幕の幅は四キュビトである。三十は五(人としての責任)×六(人を表す)である。四は普遍性を表す。キリストがなされた責任、人々に行き渡る贖いを表す。十字架の死と復活、それが折り重ねられた六枚目の幕によって表されている。それはまた、死と復活によって、罪の赦しと罪の忘却という二重の義を私たちにもたらしたことの象徴でもある。この幕は、内側の幕より大きく、祭司が仕える幕屋をすっぽりと完全に包み込んだ。キリストの贖いによってもたらされる義の完全さである。

五枚の幕と、六枚の幕は、輪によって互いに連ね合わせた。こうしてできた二枚の幕を青銅の留め金五十個で互いに合わせ、一つの幕とした。五十は聖霊降臨の数。青銅もまた贖いの象徴である。この幕は、贖いをなされたキリストの型である。

③赤くなめした雄羊の皮で作られたおおい

上記の二つの幕については、「おおい」という語は使われていない。雄羊の皮とじゅごんの皮について、「おおい」という語が使われている。「幕」はキリスト自身を示し、「おおい」は地上に表されたキリストの神性を示す。

任職の雄羊の血は、祭壇の側面に注がただけでなく、アロンとその子らの右の耳たぶと、右手の親指と右足の親指

とにつけられ、彼らは神に対する献身を要求された。

「そしてあなたはその雄羊をほふり、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、その子たちの右の耳たぶとにつけ、また彼らの右の手の親指と、右の足の親指とにつけ、その残りの血を祭壇の四つの側面に注ぎかけなければならない。」(出エジプト 29:20) 私たちの耳、手、足は、神の働きのため聖別されている。耳は、神のみ声を聞くものとして、手は奉仕するものとして、足は聖い歩みのために。

雄羊は、任職を示し、赤くなめしたということは、死に至るまでご自身を身代わりの犠牲にされたキリストの献身、従順を表している。

④じゅごんの皮で作られたおおい

じゅごんの皮は、あざらしやいるかのかたい皮であったと考えられている。粗末ながらも耐久性と保護能力にすぐれていた。見栄えがしないものであったので、行きずりの人の目には、この下に栄光と美と富が隠されているとは想像もつかなかったことだろう。

このおおいは、栄光の神であられるのに、罪人である人となって来られたキリストのへりくだりを表す。

「彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。」(イザヤ 53:2,3)

「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」(ペリピ 2:6,7)

幕屋のおおいが、外から内側に向かって順に、キリストのへりくだり、従順、贖い、栄光となっているのは、偶然ではない。